

## 獅騰鷹目行似女手(シタンヨウモク、オコナウニメテヲモツテス)



### 片 桐 聡 医師 消化器外科医

(高校35回) 東京都在住

高校を卒業してから四半世紀が過ぎました。

目を閉じると高校時代の思い出は、今でも走馬灯のように私の臉に蘇ります。

通学路であった“大根坂”を日々上り下りしていた頃は まだ男女共学になったばかりで、男性陣は肩身の狭い思いをしていたものでした。

どんな時でも女の子が強く、いつも友人たちと部室に逃げ込んで 部活ばかりの毎日でした。

いつの間にかに私は、白髪を気にする中年になってしまいました。

そして今でも女性中心の職場で働き、女子大生相手に教鞭をとっています。

今、東京女子医科大学病院で消化器外科医をしています。

高校時代と同じように、多くの女性看護師、女性コメディカル、女子学生の中で仕事をする毎日です。

肩身の狭さは 27年経っても変わっていません。

しかしながら 現在の状況が無理なく受け入れることができるのは、あの3年間の経験が 私の心の中に生きているからでしょうか。

高校を卒業するまでに 小学校の修学旅行も含めて2回しか 東京へ行ったことのない勉強が苦手な私が、いま東京の真ん中の新宿で医師をしているとは 高校時代には想像すらしたことはありませんでした。

父親も私が医者になることには反対でした。

消化器外科の仕事は、“癌との闘い”であります。

その中で私は 肝臓癌に対する手術治療と肝移植が専門です。

仕事は体力勝負です。

若かりし頃は、朝6時から仕事が始まり 終わるのが夜中。

家で寝られるのは 1週間に 1 日のみで、休日は4ヶ月間なし、月給4万円という過酷な生活でした。

しかしそれが当たり前でした。

10日ぶりにアパートに帰ったところ、電気も水道も止められており また病院の当直室に戻ったこと

を思い出します。

アパートも借りず、住民票を病院に移してしまった強者同期もいました。

今では 当直や夜間の緊急手術を除けば、大抵は家で寝ることができるようになりましたが、朝は7時半の回診から始まり、帰宅はシンデレラという生活です。

仕事内容は手術が中心ですが、大学病院勤務という特殊性から診療のみでなく、学会発表、論文作成をはじめとした研究活動、学生や若い医局員 研修医 看護師を対象とした教育、医局と病院の運営など多岐にわたります。

患者様とだけ接していればいいというわけにはいきません。

また今の日本の医療は医師不足、病院閉鎖、救急患者の受け入れ拒否、医療ミス 隠蔽問題など危機に面しています。

その中でも若い医師の外科離れが加速してきており、多くの医局講座の中でも3K（きつい、汚い、危険）と言われている 外科分野に飛び込んでくる若手は めっきり少なくなりました。看護師も同じです。

医療崩壊は、外科病棟や手術室では いっそう深刻な問題になっています。

テレビの外科病棟や救急医療を扱う番組のように 決してかっこのいいものではありませんし、それを見て懂れて来る若手もちらほらです。

そのような中でもやっつけていけるのは、自分は 携わった患者様が元気になり、病気を克服する場面に接した時であります。臭い台詞ではありますが、自分の体が ガタつくようになった今だから言えるようになりました。

また、この仕事を通して 学会や医療協力で海外に出ることが多くなりました。

今までに28カ国に渡り、今年もアルゼンチン、モンゴル、フランス、ドバイに仕事で行く予定です。

海外に出ることは大きな刺激になりますし、新たな発見が数多く隠れています。

私の好きな言葉に、獅騰鷹目行似女手（シタンヨウモク、オコナウニメテヲモツテス）という言葉があります。“外科医は獅子の胆(騰)を持ち鷹の目で、処女の手で手術を行うべし”といった意味があります。

若き研修医時代の過酷な経験や、高校時代に女子の中で生活していた時の感性が、手術の場でも発揮できればと思うこのごろであります。

百周年おめでとうございます。どんな形でもいいと思っています。母校に、後輩たちのために何か貢献できることはないかと考えています。